

ナガミーズ語の名詞修飾

村上武則

京都大学大学院博士後期課程

キーワード：名詞修飾、名詞化、補文化、関係節、クレオール

1 はじめに

ナガミーズ語はインド・アール系のアッサム語をドナー言語、チベット・ビルマ系のナガ諸語とコニャク諸語をホスト言語とするクレオール言語と定義される。ナガミーズ語はインド北東部ナガランド州全域に普及し州の全人口に相当する 200 万人以上によって共通語として話され、州内にはナガミーズ語を母語とする者も数万人以上存在していると見られる (Venkatesh 2018)。ナガミーズ語が言語学の研究対象となったのは Sreedhar 1974 が最初であり、M. V. Sreedhar はナガランド州西部先住民のカチャリ人の話すナガミーズ語のみをクレオールであるとして他のナガ系諸民族の話す変種をピジンとして区別しているが (Sreedhar 1974, p. 73)、本稿ではナガ系諸民族の話すナガミーズ語もクレオールであるとの立場を取る。ナガランド州においてナガミーズ語は実質的な共通語として最も広く理解される言語であるにもかかわらず公用語の地位を得ておらず、現在でもその法的位置づけが明らかではない。ナガランド州の公用語は英語であり、ナガミーズ語の中にも英語からの借用語が多数用いられ文中における許容度も高い。ナガミーズ語の口語には複数の民族の変種が確認されており (Sreedhar 1974, pp. [71]-89, [129]-139)、それと連動する形での地域の変種が分布している。本稿で扱う口語のデータは地域的には州都コヒマ付近の南部変種、民族的にはアンガミ・マオ系変種である。

2 ナガミーズ語の基本的特徴

2.1 形態・統語の基本

ナガミーズ語は SOV 型の語順を取り、TAM 標示は動詞接尾辞によって表される。基本的な代名詞と格標識は以下の通りである。

1sg. moi / ami 2sg. toi / tumi / apuni (apni) 3sg. tai (性の区別なし)

複数形は =khan を付加

主格=Ø

属格 =laga, (=la)

与格 =loi, =ke, (=k)

対格 =ke, (=k)

共同格 =logo, =logo=te, (=lo)

所格 =te, (=t)

奪格・具格 =pora

=pora は動作主を標示することも可能であり、これは基層言語における具格動作主標示の影響によるものと考えられる。括弧内の語形は短縮形を表す。

2.2 音韻論の基本

ナガミーズ語の音節構造は (C)(C)(V)V(C)(C) であり、音素は以下の通りである。

母音 /a/([ə]~[a]), /i/, /u/([u]~[ʊ]), /e/([e]~[ɛ]), /o/([o]~[ɔ]~[ʊ])

ヒンディー語の影響で /ə/ と /a/ の対立が新たに導入されつつあると見られるが未だ区別に一貫性が無く、本稿では /ə/ を独立の音素とは見做さず /a/ の異音とする。/u/ と /o/ は頻繁に交代するが、特定の語で最小対を成すため別々の音素として扱う。例. pura 「完全な」、pora 「～で、～から、～によって」(具格、奪格、動作主の標識)

子音 /k, k^h([k^h]~[x]), g, ŋ, tɕ([tɕ]~[tɕ^h]~[tʃ]), dʒ([dʒ]~[dʒ]~[z]), t([t]~[t]), t^h, d, n, p, f([f]~[p^h]), b, m, j, r([r]~[r]~[ɹ]), l, w([w]~[v]~[ʋ]), s([s]~[ɕ]~[ʃ]), h/

/tɕ/ はアッサム語には存在しない音素で、ヒンディー語、ベンガル語あるいはアッサム語の非標準変種から移入されたと考えられる。[x], [t], [ɹ]などはヒンディー語の影響でナガミーズ語の発話中にも実現されるようになったと考えられるが、/k^h/, /t/, /r/ の異音として必ずしも語源的に対応しない位置にまで現れる。アッサム語の /x/ と /h/ はナガミーズ語でいずれも /h/ に対応する。ヒンディー語やアッサム語の有声帯気音 [b^h], [d^h], [g^h], [dʒ^h] に対応する表記 <b^h>, <d^h>, <g^h>, <j^h> はナガミーズ語を書く際には綴りとして現れるが、実際の談話中の音声実現は無気音の [b], [d], [g], [dʒ]~[z] または [p^h],

[^h], [k^h], [t^ɕ] などの無声音になり、たとえ個々の話者が有声帯気音を発声可能であってもナガミーズ語において一貫した音素として認められない。本稿では書かれた文章を引用する際には原綴りをそのまま残し、グロスでは音韻表記に基いて有声帯気音を有声無気音 /b, d, g, dz/ として扱う。/i/ と /e/ の交替も頻繁に見られるが、表記 <e> は実際には英語の e-mail の e- [i] のように /i/ を表していることがしばしばある。母音間に挟まれた子音が有声化することも多い。

2.3 方法と凡例

本稿のデータは 2019 年 4 月から 2020 年 1 月の間でのインド北東部ナガランド州およびマニプル州北端部における数度の現地調査によって得られたもの、および 2020 年以降に SNS とメールによって調査を行った結果と、ナガミーズ語のウェブサイト (Nagamese Open Bible Stories、https://door43.org/u/Door43-Catalog/nag_obs/master/ 以下 NOBS と略、数字は章の番号を表す) より抽出した用例に基くものである。インフォーマントの確認を経た作例であるか、または筆者が調査中に遭遇したにもかかわらず音声記録を怠ったり取得源がうる覚えであったりした用例を再構成してインフォーマントに確認したものについては出典を記していない。主な調査協力者は以下の 4 名である。右端の V. S. はナガランド州出身の非ナガ系民族の話者で、それ以外の 3 名はナガ系のマオ人である。調査の媒介言語は主に英語であるが、一部ヒンディー語とマニプリ語とタドウ語も使用した。

調査協力者	D. Ch. (男)	K. Ch. (男)	D. A. (男)	V. S. (女)
L1	Nagamese	Nagamese	Mao	Thadou-Kuki
L2	Mao	Mao or English	Nagamese or Manipuri	Nagamese
年齢 (±1)	33	30	37	32

グロス中に用いる略号は

Leipzig Glossing Rules (<https://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>) のものに準じるが、CVBL は *converbial* 「副動詞的接続形」、SEQ は *sequential* 「継起」、AGT は *agentive* 「動作主標示」とする。

3 ナガミーズ語の名詞修飾

ナガミーズ語の名詞修飾は修飾要素が被修飾名詞の前に現れ、以下のようなストラテジーを取る。以下は例文番号、Boruah 2014 の辞書に倣ったナガミーズ語の慣用的な表記、日本語訳、グロス(必要な場合のみ)の順に記す。

3.1 形容詞による修飾

(1) *lal kagoj* 「赤い紙」

lal kagoɕ

red paper

(2) *dangor chua* 「大きなネズミ」

dangor teua

big mouse

語順を逆にした *chua dangor* は名詞句ではなくコピュラ *ase* を省略した文「ネズミが大きい」と解される可能性があり、名詞修飾のあり方としては標準的ではない。

3.2 数詞による修飾

(3) *16 jati khan* 「16 の民族」、複数接語 *=khan* の使用は任意である。

(4) *3 hopta* 「3 週間」

ナガミーズ語の数詞は 1 から 10 まではアッサム語由来の形が、11 以上の数字は 20 (*bis*), 30 (*tis*), ..100 (*ho*) などの語形が単純なものを除き、ほとんど英語で代用される。

数詞はアッサム語の類別詞に由来する *=ta* を伴うことがあり、この *=ta* を伴う形では名詞の後ろにも現れる。

(5) *ekta solution / solution ekta* 「一つの解決法」

3.3 指示詞による修飾

itu 「これ、それ」、*otu* 「あれ」、*kuntu* 「どれ」

(6) *itu manu* 「この男」、(7) *otu maiki* 「あの女」、(8) *kuntu gari* 「どの車」

後置型の修飾も見られるが、その場合文のトピックとして強調を受けてい

ると解釈され、述語部分には現れることは少ない。

(9) *Manu itu criminal ase.* 「この男が犯人です。」

<i>manu</i>	<i>itu</i>	<i>kriminal</i>	<i>ase</i>
man	this TOP	criminal	is

(10) *Criminal tu itu manu ase.* 「犯人はこの男です。」

<i>kriminal</i>	<i>=tu</i>	<i>itu</i>	<i>manu</i>	<i>ase</i>
criminal	TOP	this	man	is

(*Criminal tu manu itu ase.* も可だが非標準的)

3.4 名詞の連続あるいはゼロ属格修飾

民族名、言語名、国名、会社・ブランド名、品種名、地名を表す固有名詞などで名詞の連続あるいはゼロ属格修飾と考えられるものが見られる。

(11) *Meitei jati* 「メイテイ民族」、(12) *Hindi kitab* 「ヒンディー語の本」

(13) *Japan manus* 「日本人」、(14) *Toyota gari* 「トヨタ車」、

(15) *Sakura ful* 「桜の花」、(16) *Eden bagan* 「エデンの園」

これらは英語からの借用表現の固有名詞にも多く見られ、後述するナガミーズ語の *=laga* による属格標示をあえて行わずにそのままの形で用いられる。

(17) *Nagaland police* 「ナガランド警察」(通例 **Nagaland laga police* とは言わない)

(18) *Dzukou valley* 「ヅコウ溪谷」(固有名詞として **Dzukou laga valley* とは言わない)

慣用的に用いられる名詞連続表現として次のようなものがある。これらは中身と容れ物の関係にあることが多い。属格標識 *=laga* の使用は任意であり、単なる属格の省略とも見做しうる。これらは一種の複合語としても解釈が可能である。

(19) *alu bag* 「ジャガイモの(入った)袋」(*alu laga bag* も可)

(20) *pani bottle* 「(飲料)水のボトル」(*pani laga bottle* も可)

(21) *gajor kheti* 「ニンジン畑」(*gajor laga kheti* も可)

3.5 属格標識 =laga を用いた修飾

名詞と名詞の連結において修飾する側の名詞の直後に属格標識の =laga が付加される。

(22) mekuri laga theng 「猫の脚」

<i>mekuri</i>	=laga	<i>t^hey</i>
cat	GEN	leg

(23) professor laga kitab 「教授の本」、(24) tai laga suali 「彼(または彼女)の娘」

以下の例では簡素化のため tai は性の指定の無い限り男性を指すものとする。

この laga はアッサム語の動詞 √lag 「付く」の動名詞形に由来し、一般に所有関係を表す。

=laga には短縮形 =la も存在する。

(25) toi la gari 「君の車」

laga による属格は主要部不在の所有表現を成すことも出来る。

(26) Otu moi laga ase. 「あれは私のだ。」

<i>otu</i>	<i>moi</i>	=laga	<i>ase</i>
that	I	GEN	is

ナガミーズ語の =laga は日本語の「の」と同様に素材や構成要素を表すことも可能である。

(27) aluminium laga thali 「アルミ製の皿」

<i>aluminium</i>	=laga	<i>t^hali</i>
aluminium	GEN	dish

ただし =laga を伴わない aluminium thali も可能である。

代名詞においてアッサム語形に由来する -r を伴う属格形が現れることがあるが、その多くは無意味属格形であり =laga が属格標識として重ねて用いられる。おそらく歴史的には -r 属格形と =laga を用いた属格形の両方が共

存していたであろうと予想されるが、アッサム語由来の *-r* 属格形が単独で属格の機能を果たすことは現代のナガミーズ語では少なくなっているように見られる。3 人称代名詞 *tai* については、アッサム語形由来の *tar* が無意味属格形としても主格形としても用いられることがある。

(28) *mor laga kitab / amar laga kitab / (amar kitab)* 「私の本」

(29) *moi laga kitab / ami laga kitab* 「私の本」

3.6 動名詞による修飾

各動詞の *-a* で終わる不定詞・動名詞形は名詞の前に直接置かれて名詞を修飾することが出来る。これはおおよそ日本語の連体修飾に対応していると考えられる。

(30) *Nagaland te thaka foreigner* 「ナガランドに滞在している外国人」

<i>nagaland</i>	<i>=te</i>	<i>tʰaka</i>	<i>forinar</i>
Nagaland	LOC	staying	foreigner

名詞を修飾する動名詞が目的語を有していることもある。

(31) *sabzi ke morai diya bimar* 「野菜を殺す病気」

<i>sabẓi</i>	<i>=ke</i>	<i>mora</i>	<i>-i</i>	<i>diya</i>	<i>bimar</i>
vegetable	ACC	die	CVBL	giving	disease

受動形の動名詞も同様に名詞を修飾する。

(32) *likhiya kotha* 「書き言葉」 (Aye 2015, p. 56)

<i>likʰiya</i>	<i>kotʰa</i>
written	speech

以下の例では主要部の *professor* を修飾している動名詞 *khawa* が補文化を行っているように見做すことも可能である。

(33) *Kali tumi laga ghor te bhat khawa professor tu TV program te ase.*

<i>kali</i>	<i>tumi</i>	<i>=laga</i>	<i>gor</i>	<i>=te</i>	<i>bat</i>	<i>kʰawa</i>	<i>profesor</i>	<i>=tu</i>
yesterday	you	GEN	house	LOC	rice	eat	professor	TOP

tiwi program =te ase

TV program LOC is

「昨日君の家でごはんを食べた教授がテレビに出ている。」

なお (33) において khawa は kali「昨日」という時間の指定が無ければ「食べている」(現在)と「食べた」(過去) のどちらの意味にもなりうる。

kowa「言う」を用いた埋め込みにより、文の定動詞部分と何の関係もない内容であっても主語名詞を修飾することが可能である。

(34) *Moi ke 'moribi' kowa maiki tu biya hoishe.*

moi =ke mor -i -bi kowa maiki =tu

I ACC die CVBL IMP saying woman TOP

biya ho -i -se

marriage become CVBL PST

「私に『死ね』と言った女が結婚した。」

補文機能の無い現在時制と過去時制の定動詞形は名詞を修飾することは出来ず、名詞ではなく述語を倒置した文に解される可能性がある。

(35*) **murkho ase manu* (ase はコピュラ動詞の現在形)

(35) *murkho manu* 「愚かな男」は可。

*は「愚かだ、男は。」という倒置文ならば成立可だが非常に限定的。

(36*) **pap korise maiki* (korise は動詞 kora「する」の過去形)

(36) *pap kora maiki* 「悪いことをしている女 / 悪いことをした女」は可。

pap kora maiki

sin doing woman

*は「悪いことをした、女は。」という倒置文ならば成立可だが非常に限定的

以下は属格標識の =laga と紛らわしいが、動名詞の laga「付く」を用いた名詞修飾である。

(37) *dam laga kitab* 「値段の張る本」、*「値段の本」ではない

dam laga kitab

price requiring book

3.7 動名詞によって補文化された関係節による修飾

Baishya 2013, p. 226 において関係節の例として以下の文が挙げられている。

(38) Apni moi ke kali diya kitab tu bisi dam laga ase.

<i>apni</i>	<i>moi</i>	<i>=ke</i>	<i>kali</i>	<i>diya</i>	<i>kitab</i>	<i>=tu</i>
you	I	DAT	yesterday	giving	book	TOP
<i>bisi</i>	<i>dam</i>	<i>laga</i>	<i>ase</i>			
much	price	requiring	is			

「あなたが私に昨日くれた本はとても値が張る。」

The book you gave me yesterday is expensive.

(39) Apni bisi bhal ase kowa manu tu moi laga dushmon ase.

<i>apni</i>	<i>bisi</i>	<i>bal</i>	<i>ase</i>	<i>kowa</i>	<i>manu</i>	<i>=tu</i>	<i>moi</i>	<i>=laga</i>	<i>dusmon</i>	<i>ase</i>
you	much	good	is	saying	man	TOP	I	GEN	enemy	is

「あなたがとても良いと言った男は私の敵である。」

The man you praised (lit. said) a lot is my enemy.

(40) Apni kali lok pawa manu tu amar laga mama ase.

<i>apni</i>	<i>kali</i>	<i>lok</i>	<i>pawa</i>	<i>manu</i>	<i>=tu</i>	<i>amar</i>	<i>=laga</i>
you	yesterday	encounter	gaining	man	TOP	my	GEN
<i>mama</i>	<i>ase</i>						
uncle	is						

「あなたが昨日会った男は私の叔父です。」

The man you met (lit. found) yesterday is my uncle.

(原文にはインド・アーリア語の借用元の原語に相当する a の母音の長音表記があるが、ナガミーズ語においては音韻的に母音の長短の対立は存在しないので全て a で表記を統一し、また筆者の判断で語の区切りを一部変更した。グロスと例文番号は本稿で使用するための付加的情報であり、原文には存在しない。)

(38)-(40) はいずれも -a で終わる動名詞形で節を閉じ、後続する名詞を修飾している。(38) は kitab 「本」は修飾節における動名詞の目的語であり、同時に主文の主語に当たる。(39) の動名詞 kowa 「言う」を使った埋め込み節による修飾の例では被修飾名詞との間に格関係が存在しており、manu 「男」は kowa の斜格目的語として (say about him) 扱われている。すなわち (38), (40)では対格関係が、(39) では斜格関係が関係節と被修飾名詞との間に想定されている。節内の主語と被修飾名詞が主格関係で一致するものは 前節 3.6 で論じた例に相当する。次に Faquire 2014, p. 26 に述べられた「分詞的關係節 (Participial relative clause)」における格関係の含意の分類に基いて他の格関係を有する修飾の例を見る。

(41) bisi muslim thaka jaga 「たくさんムスリムが住んでいる場所」

bisi muslim t^haka dzaga

much muslim staying place

この例では jaga 「場所」に(=te, 所格) たくさんのムスリムが住んでいるという所格の関係が関係節と被修飾名詞 jaga との間に想定されている。

(42) Puali ke bhat khai diya chamus beka hoise.

puali =ke bat k^ha -i diya teamus beka

child DAT rice eat CVBL giving spoon twisted

ho -i -se

become CVBL PST

「子供にご飯を食べさせるスプーンが曲がってしまった。」(桐生 2018)

chamus 「スプーン」で(=pora, 具格) ご飯を子供に食べさせるという具格の関係が関係節と被修飾名詞 chamus との間に存在している。

(43) Apuni pora kitab diya lora tu Kohima te jaise.

apuni =pora kitab diya lora =tu kohima =te dza -i -se

you AGT book giving boy TOP kohima LOC go CVBL PST

「あなたが本をあげた少年はコヒマに行った。」

一見 (38) と似ているが被修飾名詞の lora 「少年」は節内動詞 diya 「与える」の間接目的語であり、関係節との間に与格の関係が存在している。

(44) Otu manu phone beya howa student ase.

otu manu fon beya howa student ase

that man phone bad becoming student is

「あの男が(彼の)携帯電話が壊れた(という)学生だ。」(倉部 2018)

この例では節内主語の *phone* が 被修飾名詞の *student* に所有されている (*student laga phone*) という属格関係が含意されている。しかし動詞を見ると「彼にとって電話が壊れる」事態が生じたという被害の斜格関係が存在しており、(39) と同じタイプに分類することも可能である。

動名詞は主要部不在の名詞句を成すことも可能である。

(45) Moi diya tu comic ase, dictionary nai.

moi diya =tu komik ase diksanari nai

I giving TOP comic is dictionary is not

「私があげたのはマンガで、辞書ではない。」

(46) tumi pora tai ke morai diya pap 「君が彼を殺した(という)罪」

tumi =pora tai =ke mora -i diya pap

you AGT he ACC die CVBL giving sin

この例では節全体が被修飾名詞の *pap* と同格で罪の内容を説明しているに過ぎない。あるいは、*pap* を節の内容の「結果(生じた罪)」であると解釈すると *pap* は 寺村 1975 p. 111 が「外の関係」と分類しているものに相当する。

laga が補文化の動名詞の後に後続することがある。

(47) Isor pora bagan te berai thaka laga awaj 「神が庭を歩いている音」(NOBS 2)

isor =pora bagan =te bera -i t'aka =laga awadz

God AGT garden LOC roam CVBL staying GEN sound

この *laga* が属格標識の *=laga* と同一であるか、それとも動名詞として *thaka* 以前の名詞句の内容が被修飾名詞に対して「付随している (*adhering*)」と述べているのかは正確には判断出来ないが、*laga* を省略しても文意は変わらない。

(48) Isor pora bagan te berai thaka awaj 「神が庭を歩いている音」

この場合は節内の要素ではない名詞を修飾しており、「外の関係」を表す名詞修飾となる。

次も名詞修飾節の表す事態の結果生じたものが主要部名詞となる例である。

(49) Tai jit howa reward tu 1 million dollar ase.

tai dzit howa riword =tu 1 m. d. ase
 he win becoming reward TOP million is

「彼が勝った褒賞は 100 万ドルだ。」

3.8 未来形 -bo を補文標識とするもの

動詞の未来形 -bo が後続する名詞を修飾することも出来る。ただし -bo 形は動名詞と違って定動詞としてもこのままの形で機能するため、名詞修飾に使われる例は動名詞と比して極めて限られている。

(50) olympic player hobo lora 「(将来)オリンピック選手になる少年」

olimpik pleyar ho -bo lora
 olympic player become FUT boy

(51) manus na-kamuribo kutta 「人を噛まない犬」

manus na- kamur -i -bo kutta
 person NEG bite CVBL FUT dog

(52) Dimapur airport te ahibo flight tu IndiGoAir ase.

dimapur eaport =te ah -i -bo filait =tu indigo ea ase
 Dimapur airport LOC come CVBL FUT flight TOP IndiGoAir is
 「ディマプル空港に到着する航空便はインディゴ航空(の便)です。」

この例では未来形 ahibo 「来るだろう」が flight 「航空便」を修飾しているが、名詞句 ahibo flight だけを抽出すると Flight ahibo. 「航空便が到着するだろう。」という文の倒置文と解釈される可能性がある。これも -bo が定動詞として機能する形であることに起因していると思われる。

未来形 *-bo* は 3.7 節に述べた動名詞 と同じく名詞を修飾する関係節構造を取ることが可能である。

(53) *Ami pora dibo kitab poribi.* 「私_Iがあげる本_{book}を読みなさい_{read}。」

ami =pora di -bo kitab por -i -bi
I AGT give FUT book read CVBL IMPR

被修飾名詞 *kitab* 「本」は節内の動詞部分 *dibo* 「あげるだろう」の直接目的語であり対格の関係が存在している。このように *-bo* にも *-a* で終わる動名詞と同じ補文機能があることが分かるが、*-bo* 形は名詞として使われることはない。

(54) *khawa-lowwa* 「食料 (lit. 食べること・取ること)」 **khabo-lobo* は名詞としては不可

また、3.7 節同様に *-bo* によって補文化された節が修飾する名詞との間に主格や対格以外の格関係を持つことも出来る。

(55) *moi laga bura baba laga baba thakibo sorgo tu itu prithibi te nai.* (所格)

moi =laga bura baba =laga baba thak -i bo sorgo =tu
I GEN old father GEN father stay CVBL FUT heaven TOP
itu prithibi =te nai
this world LOC is not

「私のひいおじいさんがいるだろう天国はこの世界には無い。」

(56) *Gas katibo kuthar dibi!* 「木_{tree}が切れる斧_{axe}をくれ！」(意味的には具格)

gas kat -i -bo kuthar di -bi
tree cut CVBL FUT axe give IMP

gas 「木」を *kuthar* 「斧」が切るので機能的には主格である。

(57) *Apuni paisa dibo maiki tu criminal ase.* (与格)

apuni paisa di -bo maiki =tu kriminal ase
you money give FUT woman TOP criminal is

「あなたがお金をあげようとしている女性は犯罪者だ。」

(58) Kokai policeman hobo lora tu suri korise. (属格)

kokai policeman ho -bo lora =tu suri
 elder brother policeman become FUT boy TOP theft
kor -i -se
 do CVBL PST

「兄が警官になる少年が泥棒をした。」

(59) Kohima te PM ahibo khobor ase. (同格)

kohima =te PM ah -i -bo k^hobor ase
 Kohima LOC PM come CVBL FUT news is

「コヒマに首相が来る(という)ニュースがある。」

ただし引用符として *koikena* 「という」(「言う」の継起形) を *ahibo* の後ろに用いたものの方がより自然な文であると解される。

(60) Kohima te PM ahibo koikena khobor ase. 「コヒマに首相が来るというニュースがある。」

この *-bo* 未来形が後述する *-bo-le* 接続形と同様に思考や意図に関係した名詞を修飾することがある。文中に使われている *khabole* は条件を表す用法で名詞は修飾していない。

(61) Itu maiki gaas te thaka guti dikhikena bisi sundor lagise aru khabole bisi bhal hobo bhabna kurise. (NOBS 3)

itu maiki gaas =te t^haka guti dek^h -i -kena
 this woman tree LOC staying fruit see CVBL SEQ
bisi sundor lag -i -se aru k^ha -bo -le
 much beautiful feel CVBL PST and eat FUT SBJV
bisi bal ho -bo babna kor -i -se
 much good become FUT thought do CVBL PST

「この女は木に実が成っているのを見てとても美しいと思い、そして食べたらとても美味しいだろうと考えた。」

ここでは *bisi bhal hobo* 「美味しいだろう」が補文化され *bhabna* 「思考」を修飾し *bhabna* の内容を述べている。

3.9 接続法 -bo-le 形を補文標識とする非実現の名詞修飾

従来接続法の -bo-le 形は条件や目的などを表す複文の従属節に現れるものであるが、補文化の機能を持ち名詞を直接修飾することも可能である。

(62) *Moi gor te jabole mon ase.* 「私は家に行きたい。」

moi gor =te ja -bo -le mon ase
I house LOC go FUT SBJV mind exist

jabole で補文化された節「私は家に行きたい」は *mon*「精神」を修飾する。

この際に *mon*「精神」の所有者である動作主 *moi*「私」はトピック主語として無標の形を取り、所有文に通例現れる属格標示を受けない。

動詞の接続法 -bo-le 形はこの他に「思考 (*babona*)」、「思惑 (*babi*)」、「知恵 (*gyan-budi*)」、「願望 (*icha*)」、「期待、希望 (*asha*)」、「努力 (*kosis*)」、「同意、許可 (*monjur*)」、「命令 (*hokum*)」、「理由、目的 (*nimit*)」、「能力 (*shakti*)」、「権利 (*hak*)」、「方法 (*rasta*)」、「時期、タイミング (*homoi*)」、「決定 (*faisla*)」、「知らせ (*khobor*)」、「*hosa* (真実)」といった抽象名詞と結びつく傾向にあり、未だ実現していない動作に関する補文化が可能である。

(63) *bhal-bia janibole gyan-budhi* 「善悪を知るための知恵」 (NOBS 1)

bal beya dzan -i -bo -le gyan budi
good evil know CVBL FUT SBJV knowledge wisdom

(64) *Aru tai apuni ke pap logote lorai kuribole shakti dibo.* (NOBS 49)

aru tai apuni =ke pap =logo =te lorai
and he you DAT evil SOC LOC fight
kor -i -bo -le sakti di -bo
do CVBL FUT SBJV strength give FUT

「そして彼はあなたに悪と戦うための力を与えるだろう。」

(65) *itu prithibi khotom hobole homoi* 「この世界が終わる時」 (NOBS 50)

itu prithibi khotom ho -bo -le homoi
this world end become FUT SBJV time

(59) の -bo を -bo-le に変えた文も可能で、意味上の違いは特に認められない。

(66) Kohima te PM ahibole khobor ase.

kohima =te PM ah -i -bo -le k^hobor ase

Kohima LOC PM come CVBL FUT SBJV news is

「首相が来るだろうというニュースがある。」

接続法の -bo-le 形によって補文化された節は被修飾名詞の内容を説明する同格の用法を持つ。

一方で接続法 -bo-le 形は動詞で述べられる目的を実現するための道具や手段を表す一般名詞を修飾することも可能である。

(67) English hikabole kitab 「英語を教える(ための)本」

inglis hika -bo -le kitab

English teach FUT SBJV book

(68) Arunachal jabole permit 「アルナーチャル州へ行く(ための)許可証」

arunateal dza -bo -le pamit

Arunachal go FUT SBJV permit

動名詞と未来形と接続法形の名詞修飾の違いは以下の点に見出される。

(69) khawa kutta 「食べる犬」 (khabo kutta 「食べるだろう犬」、この名詞句単独では極めて容認性が低く、「食べるだろう、犬が」という倒置文と解釈される可能性がある)

これらは何かを食べる犬のことで、食用犬については

(70) khabole kutta 「食べるための犬」あるいは

(71) khabole para kutta 「食べるのが可能な犬」となる。

k^ha -bo -le para kutta

eat FUT SBJV possible dog

para を未来形にした

(72) khabole paribo kutta は「(これから何かを)食べられる犬」を指す。

k^ha -bo -le par -i -bo kutta
eat FUT SBJV be possible CVBL FUT dog

(73) Ami khan laga survival nimate tai ami khan ke khabole kutta dise.

ami =k^han =laga sabaibal nimit =(t)e ami =k^han =ke k^ha -bo -le
I PL GEN survival reason LOC I PL DAT eat FUT SBJV
kutta di -se
dog give PST

「私たちの生存のために彼は私たちに食べる(ための)犬を与えた。」

つまり -bo-le が用いられる場合は目的を実現するための動作主体が被修飾名詞とは別に存在し、被修飾名詞とは一致しない。

(52) の -bo を -bo-le 形に差し替えた

(72) Dimapur airport te ahibole flight tu IndiGo Air ase.

dimapur eaport =te ah -i -bo -le filait =tu indigo ea ase
Dimapur airport LOC come CVBL FUT SBJV flight TOP IndiGoAir is

「ディマプル空港へ来る(ための)フライトはインディゴ航空です。」

(52) は空港に到着する航空便について単に述べただけであるが、(72) の場合は具体的な誰かがディマプル空港に来るために搭乗する便について述べているという違いがある。

「外の関係」を表す修飾の場合、節内の動詞部分が未来形または接続法形の場合は、動詞部分の結果として生じる節外の要素を修飾することは出来ない。

(73) mach jola gund 「魚を焼くにおい」

mate dzola gund
fish burning smell

*mach jolabo gund / *mach jolabole gund は不可

gund 「におい」は魚を焼いた結果として現れるものであり、また「におい」を使っても魚をこれから焼くことは出来ないため、*-bo*, *-bo-le* 形による修飾は出来ない。

これに対して「内の関係」(寺村 1975 p. 110) においては、動名詞、未来形、接続法形いずれも名詞を修飾することが可能である。

(74) *mach jola ag* 「魚を焼いている / 魚を焼いた炎」

(75) *mach jolabo ag* 「魚を焼くだろう炎」(この名詞句単独では容認性が低い)

(76) *mach jolabole ag* 「魚を焼くための炎」

以下の例は寺村 1977 p. 34 が「短絡」と呼ぶものに相当すると考えられる。

(77) *gyani hobole kitab* 「(読者が)賢くなる(ための)本」

gyani ho -bo -le kitab
wise become FUT SBJV book

(78) *Itu rasmalai tu morte na hobole mithai ase.*

itu rasmalai =tu mosto na- ho -bo -le mit^hai ase
this rasmalai TOP being fat NEG become FUT SBJV sweets is

「このラスマライは(食べても)太らない(ような)お菓子だ。」

「太らないためのお菓子だ」という解釈も可能である。

動名詞を用いた *gyani howa kitab* (?) 「賢くなる本」、*mosto na-howa mithai* (?) 「太らないお菓子」は接続法形の *hobole* を使用した (77), (78) に比べて話者の間で容認性が大きく下がった。これは被修飾名詞が動詞部分の動作を実現するのが不可能な非生物名詞で、かつ明示されていない動作主に関する動名詞 *howa* に対し被修飾名詞が具格関係を有すると解釈するのが困難であるためと考えられる。翻って *-bo-le* 形は動作主が被修飾名詞とは別に存在することをあらかじめ含意しているため、(77), (78) のような「短絡」表現も理解されると考えられる。

以下の文は被修飾名詞句が前置されているようにも見えるが、主要部内在型の名詞修飾とも考えることが出来る。ここでの *laga* は属格標識ではなく

接続法と共に用いられて「必要・義務」を表す動詞としての動名詞である。

(79) ...itu nimate tai Israel laga manu khan ke kisim-kisim niom khan tai khan manibole laga dise. (NOBS 14, 一部表記の変更を行った。)

itu nimit =(t)e tai idzrael =laga manu =k^han =ke
 this reason LOC he Israel GEN man PL DAT
kisim² niyom =k^han tai =k^han man -i -bo -le
 various order PL he PL follow CVBL FUT SBJV
laga di -se
 requiring give PST

「このために彼(=神)はイスラエルの民に様々な命令(のうち)で彼らが従う必要がある(も)のを与えた。」

laga の後に *niom khan* 「命令」が省略されていると考えることも可能である。

(80) Tai kuthar pora gas katibole tu huru ase.

tai kut^har =pora gas kat -i -bo -le =tu huru ase
 he axe INST tree cut CVBL FUT SBJV TOP small is

「彼が(使う)斧で木を切るための小さい。」

katibole の後に *kuthar*「斧」が省略されていると考えることも可能である。

4 まとめと今後の課題

ナガミーズ語の名詞修飾は基本的に前置型で、形容詞、数詞、指示詞、名詞連続のほか動詞の動名詞形、未来形、接続法形に補文化の機能があり、節を形成して名詞を修飾することが可能である。動名詞形は現在時制および過去時制の、未来形は未来時制の動作事象に基き、その動作主体および動作と何らかの格関係を持つ名詞を修飾する。接続法形は未だ実現されていない動作事象を導く意思、目的、能力、認可、事実などの抽象名詞あるいは道具や手段と結びついた名詞を修飾し、被修飾名詞と節内の動作主は一致しない。

本稿ではナガミーズ語の名詞修飾のパターンがどの程度ホスト言語から影響を受けているのか、またドナー言語のアッサム語およびその近縁言語とど

のような違いがあるのかといったことについて言及するに至らなかった。複数の名詞修飾要素が同時に存在している場合にも、おそらくはその順序に基層言語の影響があると考えられるが十分な調査を行えなかったために本稿中に述べられなかった。また相関指示詞 (correlative) の *jun* や *je* を用いた関係詞文における名詞修飾についても触れることが出来なかった。動名詞と未来形の補文化においても語彙レベルでの被修飾名詞と動詞の組み合わせに関する傾向あるいは制限の有無といった点について未だ調べられていない。これらの課題を念頭に置いて基層言語のナガ諸語と共に今後も調査を進めていくことが求められる。

参考文献

Aye, N. Khashito (2015), *Anglo-Nagamese Grammar : the Lingua Franca of Nagaland : Translated into English and Sümi*, Revised 2nd ed., ATICOS Publications, Dimapur

Baishya, Ajit Kumar (2003) *The Structure of Nagamese : the Contact Language of Nagaland*, Thesis submitted in fulfillment of the requirement for the award of the degree of Doctor of Philosophy, Department of Linguistics, Assam University, Silhar, Boruah, Bhim Kanta (2014), *Dictionary of Nagamese Language : Nagamese-English-Assamese*, Mittal Publications, New Delhi

Faquire, Razaul Karim, (2014), "Revisiting Relative Clauses in Japanese, with Reference to Bangla" 『国立国語研究所論集』 8: pp. 15-31、国立国語学研究所、https://www.researchgate.net/publication/330825404_Revisiting_Relative_Classes_in_Japanese_with_Reference_to_Bangla

Sreedhar, M. V. (1974), *Naga Pidgin : a Sociolinguistic Study of Inter-Lingual Communication Pattern in Nagaland*, Central Institute of Indian Languages, Mysore Venkatesh, Karthik (2018), "Used, but Not Claimed", *The Case of Nagamese ; an Essay*, https://raiot.in/used-but-not-claimed/#_edn7

桐生和幸 (2018) 「メチェ語の名詞修飾表現」、国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」プロジェクト、文法研究班「名詞修飾表現」、平成30年度第2回研究発表会@神戸大学、配布資料

倉部慶太 (2018) 「ジンポー語における名詞化と名詞修飾節」、同、配布資料 http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/noun/?page_id=274

寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 1—」 『日本語・日本文化』 第 4 号 pp.71-119、大阪外国語大学研究留学生別科

寺村秀夫 (1977) 「連体修飾のシンタクスと意味—その 2—」 『日本語・日本文化』 第 5 号 pp.29-78、大阪外国語大学研究留学生別科

ウェブサイト

Nagamese Open Bible Stories (NOBS)

https://door43.org/u/Door43-Catalog/nag_obs/master/

(All Weblinks Retrieved on 12. Apr. 2021)

受理日 2021 年 4 月 13 日